

# リーダーシップの視点に関する研究：金日成主体思想の首領シップと統一思想の 三大主体リーダーシップに対する比較を中心に

Do-Young, Yoon  
韓国清心神学大学院教授

## 1. はじめに

リーダーがいない組織は存在しない。現代の組織社会でリーダーは組織の内外に絶大な影響を及ぼしており、リーダーシップは、組織のパフォーマンスに影響を及ぼすいくつかの要因の中で非常に重要な要因の一つとして知られてきた。従ってリーダーシップの重要性を強調することは目新しいことではない。

1980年代以来、リーダーシップ研究において倫理性は最も羨望される研究テーマの一つになってきた。原則中心のリーダーシップ、レベル5リーダーシップ、サーバント・リーダーシップ、真実リーダーシップなど、最近、脚光を浴びるリーダーシップモデルは、間違いなく倫理的カテゴリー概念を強調している。さらに、リーダーシップの研究者は倫理的リーダーシップ研究の水準を拡大するに当たり、同時にBad Leadershipへの関心も大きくなっている。

<sup>12</sup> 良い指導者と悪い指導者はどのように区別されるか。悪いリーダーはなぜ発生し、どのような行動をし、どのような成果を創出するか。悪いリーダーのリーダーシップの特性はどのようなものか？悪いリーダーのリーダーシップから学ぶことができる学問的または経営的示唆点は果たして何か？相対的にあまり関心を受けて来なかったBad Leadershipについての議論は、私たちが知らなかった未知の領域としてリーダーシップ研究に多くの示唆を与えることが明らかである。

Bad leadershipを研究するに当たり、一つのはっきりとした事例は、北朝鮮の最高指導者のリーダーシップだ。北朝鮮社会の閉鎖性によりケーススタディをするのは容易ではないが、一つの研究対象として北朝鮮指導者のリーダーシップは興味深い研究テーマであることは明らかであり、これまでも何人かの研究者が関心を示してきた。現在、世界的に大きな反響を引き起こしている北朝鮮の過激な行動を理解するにおいて、その根源は多様であろうが、北朝鮮指導者のユニークなリーダーシップがあるという点にも注目すべきだろう。

現存する最も珍しい国家共同体-あるいは組織-と見ることができる北朝鮮は、リーダーシップにおいても相対的に非常にユニークな姿を見せている。北朝鮮の最高指導者のリーダーシップは、私たちにどのような示唆を与えるだろうか？一つ明らかな点は、金日成、金正日、金正恩とつながる北朝鮮の最高指導者のリーダーシップ行動は、即興的なリーダーシップをとる他のほとんどのBad Leaderとは非常に異なる一貫した体系的リーダーシップ行動を見せているという点だ。これは、北朝鮮社会が通常の他の組織、国家体制とは非常に異なる強力な哲学的土台の上に、思想的によく構築された社会であるという点、そしてこの指導哲学-金日成主体思想-の理論的土台の上に国家指導者のリーダーシップが発揮されているという点である。従って、北朝鮮指導者のリーダーシップ特性をその指導哲学を通して把握することは非常に意味のある作業になるだろう。

北朝鮮社会の指導哲学である金日成主体思想は、その思想体系の中で珍しく独自の指導者論を明確に示している。それがまさに“首領論”である。従って、北朝鮮の指導者像と指導システム、すなわち、リーダーシップを理解するためには、まず首領論を理解することが先行されなければならない。北朝鮮最高指導者のリーダーシップ行動という結果の原因となる哲学的基礎である首領論を調べることにより、北朝鮮に対する理解とBad Leadershipに対する理

<sup>1</sup> Barbara Kellerman, Bad Leadership, Boston : Harvard Business School Press, 2004.

<sup>2</sup> 本研究では、倫理的リーダーの対称にあるものとして、非倫理的リーダーを仮定しようと思う。

解の幅を広げることができると思う。

一方、統一思想をみると付録に“三大主体思想”という概念が紹介されているが、この概念でも統一思想が指向する理想的指導者像を論じている。三大主体思想は、その思想的そして宗教的意味を離れて、最近のリーダーシップ研究の重要な流れの一つである倫理的リーダーシップの展開において重要な示唆を提示している。<sup>3</sup> この概念は、倫理的リーダーシップの最高峰と言えるほど極端に道徳的であり、利他的な指導者像を理論化している。従って、本研究では、リーダーシップの観点から、金日成の主体思想の首領論を批判的に検討するための比較の対称にあるものとして統一思想の付録に記載されている三大主体思想を動員した。このような比較作業を通じてリーダーシップ研究は、倫理性を基準に両極端の基準を立てることができるのであり、この新しい理論モデルを通して、既存のリーダーシップ理論を収束して包括する一つの理論として機能することを期待している。

従って、本論文の研究目的は、次のとおりである。

まず、金日成主体思想の首領論をリーダーシップの観点で眺めてみようと思う。第二に、統一思想の三大主体思想をリーダーシップの観点で捉えてみたい。第三に、首領シップと三大主体リーダーシップの中核となる概念を比較することで、新たなリーダーシップモデルの端緒を論じてみたい。

## 2. 首領シップについての考察

首領とは、一般的に群れの頭領を称する言葉だ。しかし、北朝鮮での首領は単純な辞書的意味を超えて、統治理念として機能する概念に昇華された。つまり、金日成主体思想が確立され始めた1970年代には、金日成を国家指導者として信奉するように北朝鮮住民に強要する用語に過ぎなかったが、その後、社会的主体である人民大衆が歴史の主体として役割を果たすためには、必ず首領の正しい指導を必要として、そのために首領に対する忠実性が主体確立において核になるという革命的首領観にその概念が変化していった。

金日成が北朝鮮で権力を掌握した後に続いた権力闘争は、1960年代後半に一段落した。金日成の権力は強化され、彼の一人支配体制は強固になった。北朝鮮は権力闘争の終結と後継構図が明確になるにつれて支配構造に対する論理的理念体系をより実質的なものとして体系化する必要性が台頭してきた。つまり、金日成の権威構造の正当化を意味する。

このような必要性から提示されたのが、まさに革命的首領論である。革命的首領論の体系化は金日成ではなく金正日によって推進された。金正日は首領という“勤労人民大衆の最高の脳髓であり、統一団結の中心”と述べた。平壤で発行された“朝鮮語大辞典”によると、首領の定義は、次のとおりである。

人民大衆の自主的要求と利害関係を分析・総合して一つに統一させる中心であると同時に、それを実現するための人民大衆の創造的活動を統一的に指揮する中心になる方として全党と全体人民の無限の尊敬と崇拝を受けている最も偉大な指導者……敬愛する金日成同志は、わが人民の数千年歴史の中で初めて迎え、高く見上げて侍る偉大な領袖であられる。

断定的に言うと、首領論の本質は中世時代や近世時代にしか見ることができなかった絶対王権と同様の概念である。社会主義国家建設のためには、必ず指導者が必要だが、首領は人民大衆より優れた存在として、そのリーダーシップにおいて絶対的かつ卓越したものとみなされている。このような首領リーダーは絶対的かつ神聖不可侵な存在であるだけでなく、首領の血統を最もよく反映している直系子女を通して首領の優位性が維持されると主張している。これは、父子世襲体制の維持を通して国家が存続されなければならないという主張で言及されている。すなわち、金日成主体思想で首領という存在は、ただ一人の国家指導者を超え、

<sup>3</sup> 統一思想研究院、統一思想要綱、ソウル：成和出版社、2001. 785-799.

国民にとって絶対的な父、さらには神的な存在にまで美化されている。このような指導者に追従者らは彼の教えと統制に無条件に服従しなければならないと主張する。

首領論に対する学者たちの批判は、概ね次の二つの論点で収束される。

まず第一に、現実世界で首領のような絶対的に優れたリーダーは登場しにくいという批判だ。完璧な無誤謬な人間が、果たして存在できるか。<sup>4</sup> もしそのような人間が一国や組織の指導者として登場したら、その完全無欠性を裏付ける如何なるリーダーシップ特性が必要だろうか？これに対して首領論はあいまいな立場をとっている。<sup>5</sup> “革命的首領論”を言及している文献に首領の特性を論理的に客観化する根拠は十分ではない。従って、首領指導者の優位性の根拠に対する説明力が弱いという批判を避けることは難しいと思う。

第二に、首領論は金日成の家系の崇拜と血族美化運動のための方便に過ぎないという批判として、すでに論理的限界が内在しているという主張だ。北朝鮮で金日成家族は宗教的形態に近いほど信奉されており、彼らと縁がある地域は聖域化され、彼らの行跡は偶像化されている。このような途方もない位置にある首領と彼の親族が持っている特権は、どこから派生したのかという質問には、いまだ疑問が残る。<sup>6</sup> そのため、首領論が科学的かつ現実的ではなく、宗教的かつ教条主義的な立場を取っていると批判される。学者たちは、科学的論理性と現実性の適用可能性と類似の事例が欠けた主張の裏には、前近代的かつ封建的な一人独裁及び父子世襲体制を美化しようとするつじつま合わせの意図があるためだと主張している。

本研究では、首領のリーダーシップを次の3つの特性で論証しようと思う。<sup>7</sup>

まず、闘争するリーダーである。金日成の抗日闘争をベースに、北朝鮮社会を建設したように、社会主義理想郷に向かって革命を起こし闘争するリーダーシップを発揮するということだ。このような闘争性と革命性の起源は、北朝鮮社会主義と金日成主体思想が指向する弁証法的世界観に起因する。弁証法的歴史発展を哲学的基盤としている金日成主体思想において、その革命勢力の指導者である首領も、やはり常に闘争しなければならぬ弁証法的人間型なのである。闘争を通じて革命を成し遂げなければならない共同体を率いるリーダーは多分に強力なカリスマを持つ必要があり、革命を通じた理想世界に対するビジョンを提示しなければならず、同時に共同体の構成員に対する配慮と動機付与にも徹底しなければならない。反政府革命軍、独立闘士、あるいは社会運動を率いるNGO活動家などに同様の特性を見つけることができそうだ。首領が革命共同体をリードする闘争的性格の人というのは、リーダーシップの置かれた環境が制限されたものであるしかないことを暗示している。革命が必要な時期は、社会的に言えば社会的混乱期や、市場では技術的限界に到達した時点、組織では組織がもはや明確な成果を出せない時点という。如何なる社会、国家、組織にも限界状況が到来するのは当然のことである。学界でこのような転換期のリーダーシップは、変革的リーダーシップ (transformational leadership) として研究されている。従って、首領のリーダーシップはどんな状況でも適用可能なリーダーシップではなく、転換期の時点で過去の旧習や良くない習慣を極端に打破する必要がある状況に適したリーダーシップといえるだろう。

第二に、金日成主体思想の文献によると、首領は無誤謬な指導者として描写されている。こ

---

<sup>4</sup> “非凡な英知と科学的洞察力、卓越した指導方法と芸術、人民大衆の熱烈な愛と献身的服務、共産主義革命偉業に対する確固たる信念と無限の忠実性、強靱な革命的原則性と不撓不屈の闘志を持って革命を創始した人”と描写されている。

<sup>5</sup> 首領と党との関係、首領と人民大衆との関係を説明する社会生命体論に対するほとんどの原典やそれに対する学者たちの批判は、首領という人を論外とする論理的盲点を持っている。この社会生命体論の概念は、副次的なもので、決して完全無欠な首領という指導者の人間的特性を説明するものではない。私たちが首領論を通して探求すべきことは、完全無欠な指導者と位置づける首領の指導者的特性 (trait) に対する究明である。

<sup>6</sup> ほとんどの国、社会、組織の指導者は、選出の過程によって任命され、指導者としての内在的あるいは外顯的検証の過程を経る。

<sup>7</sup> シン・ドンフン、北朝鮮指導者金日成と金正日の政治的リーダーシップの研究、高麗大大学院、修士学位論文、2011。

れまで学界でケーススタディされた、いかなる人物も完璧だという評価を受けたリーダーはいない。個人や家族史、ビジョンの提示、共感傾聴、コミュニケーション、説得力、決断力、忍耐力、社会性、技術的な側面など、リーダーを評価する様々な基準で完璧だという評価を受けたリーダーはいなかった。ほとんどの事例は、ほとんど、いくつかの側面で優れていれば、模範的リーダーとして紹介される。従って、首領が誤りがありえない完璧な指導者というのは、納得しがたい主張である。社会主義理想世界を成し遂げするための革命共同体を率いる指導者が誤りのない指導者でなければならないのか。革命課業に必要なリーダーシップの要件が、他の状況に比べて相対的に大きいという点は同意する。変革的リーダーシップを研究している学者たちは、リーダーシップに多くの能力が必要であることを報告している。なぜなら、変化に直面した組織とその組織を率いるリーダーは、既成勢力と既成の慣行への反対に直面するため、より高いレベルの課題を実行する必要があるからである。しかし、そのようなリーダーがすべての面で完璧な指導者を想定しなければならない理由は明らかではない。これは非常に宗教的描写で、まるでカトリック教皇を無誤謬と仮定するのと同じ論理である。カトリックの世界で教皇は、誤謬のない指導者と見なされている。教皇の権威は絶対的だ。教皇は、誤謬があっても誤謬があることを認めることができない権威を持つ。コンクラーベを通して選出された教皇は、教会法に基づいてそうした権限の付与を受ける。金日成主体思想の文献で首領には誤謬がないと主張するのは、同様の論理である。社会主義革命を指導する首領にとって、誤謬とはありえないものであり、あったとしてもあるとすることができないジレンマを論理的に想定している。これは、首領リーダーシップがいかに宗教的な志向性を持っているかを示す代表的概念というべきである。

第三に、首領は父としてのリーダーである。文献でそして北朝鮮のスローガンやメディアで首領は、“父”として描写されている。指導者を父と表現することは、現代西洋社会では発見されない東洋の儒教的記述である。東洋の家父長的社会でリーダーはしばしば父のイメージで象徴される。金日成主体思想が他のマルキシズム的理論と差別化される決定的要素は、儒教的理想社会を夢見ているという事実であり、金日成首領を父として金正日や金正恩を後継者として見ることは、その代表的事例となる。金日成主体思想で首領は、興味深くも北朝鮮という大家族社会の父として登場している。首領は革命共同体の脳髓として象徴される冷静かつ謹厳で、そして絶対的な権威者である。ところが同時に父と言う非常に人間的で暖かな<sup>8</sup> 一次集団の代表者の姿も同時に持っている。北朝鮮で金日成の妻であり、金正日の母である金正淑はそれほど注目されていないが、金日成は首領として崇められているという点で、家父長的権威のリーダーをより強調するものと見られる。マルキストが言う同志 (comrade) には家族の概念が存在しない。共産主義社会では、家族とは排斥すべき悪い風習と見なされてきた。しかし、金日成主体思想は家庭の存在を認め、家庭の主体である父を組織の首長として形象化することで、東洋的世界観を果敢に受け入れる勇断を示した。<sup>9</sup> 北朝鮮や中国など東洋圏社会主義国では、家族の概念は決してタブー視されない。特に、北朝鮮は一つの集団主義を大家族主義に置換し、父首領の概念を安着させた。家族的温情主義が存在しながら、同時に革命的かつ集団的かつ目的志向的な闘争主義路線が同時に存在する社会なのである。首領のリーダーシップはこのような次元で、非常にユニークである。男女平等がグローバルスタンダードになりつつある現代社会で、家父長的リーダーシップが支配する国なのである。

### 3. 三大主体のリーダーシップについての考察

三大主体思想は“統一思想要綱”の付録に紹介されている概念で、理想的指導者像について

---

<sup>8</sup> 社会学では、1次集団 (primary group) と表現される

<sup>9</sup> このような論理によって教条主義だと批判されることもある。

言及している。家庭の中心である父母、学校の中心である師匠、組織の中心である団体長など3種類の指導者がいるが、この三大主体が神の真の愛を実践しなければならないという理論である。三大主体がために生きる真の愛を実践するのだが、家庭での主体である父母は相対者である子女を養育し、学校での主体である師匠は相対者である学生を教え、団体での主体である主人は温情的で公的に相対者である人的構成員と万物を主管することで責任を負わなければならない。<sup>10</sup>ところが、統一思想に表現された三大主体性 (three subjectivity) の概念は、決して独立的であったり、相互排他的な概念ではないと思われる。家庭では父母は父母であり、師匠、主人であり、学校では、教師は師匠であり、父母、主人であり、企業や国での長は主人であり、師匠、父母の役割だと述べている。従って、この三大主体性は複合的かつ多次元的概念 (multidimensional concept) だと見ることができる。

三大主体性は、次のいくつかの側面で革新的リーダーシップ特性だと判断される。

まず、現在のリーダーシップ研究は、社会科学諸学問で包括的に研究されている主題である。教育学でリーダーとしての教育者の像を研究しており、家族学ではリーダーとしての父母の像を研究しており、経営学や政治学では、リーダーとしての経営者あるいは国家統治者を扱っている。しかし、どの学問、どの理論も教育して、父母になって、主管する3つのリーダーシップ特性を一つの統一された概念として、単次元で統合させる研究は皆無である。従って、これは明らかに新しいモデルだと見ることができる。

第二に、教育者、父母、主管者の特性が一つに融和されたリーダー像は、事実上リーダーシップを研究している学者たちに夢のリーダーシップと呼ばれるだけある。急速に変化している現代の組織社会で、組織構成員に師匠として教えを受け、父母のように従い、自分の人生の責任を負うことができるほどにメンバーの絶対的支持を受ける指導者が存在するという事は非常に理想的である。従って、企業や国、非営利団体では、めったに発見されることはない。しかし、不可能だという理由も確定的ではない。なぜなら、まれにはあるが、このような組織社会でも尊敬を受ける指導者は発見されている。おそらくこのようなリーダーシップは宗教組織の聖職者が最も近いものと思われる。<sup>11</sup>

第三に、三大主体性は、これまでリーダーシップ研究でジレンマに直面していたいくつかの問題を解決する代案になり得る。ほとんどの組織や国家でリーダーとは管理 (manage) したり、指導 (lead) する者をいう。学者は、管理と指導を円滑にするための新しい概念のいくつかのリーダーシップ特性を探索してきた。<sup>12</sup> 結論として、学者らが提案した複数の属性を総合すると、現代の組織社会の構成員が夢見るリーダーとは尊敬を受けることができる者をいう。組織や社会を問わず、メンバーは自分たちが従うリーダーが、自分たちが尊敬と感謝を表示するに値するほどの資格者となることを要求している。これは、首領シップと一脈相通じるところがある。人々は自分のリーダーに平凡を望まない。首領論は、これを看破しているのだ。三大主体のリーダーは非常に極端に高いレベルの尊敬を受けることができるリーダーをいう。三大主体のリーダーは決して平凡な人ではない。<sup>13</sup> そうならば、尊敬される人とは誰なのか？ほとんどの人々に尊敬される人は、自分自身を教育した教育者、生んでくれて育ててくれた父母、人生における一部または全部を助けてくれた恩師と模範的生活で人生の灯りになってくれた宗教指導者などに象徴されるだろう。<sup>14</sup> これらを要約すると師匠、父母、主人となる。従って、三大主体とは最も尊敬を受けることができる人を三つの

---

<sup>10</sup> 統一思想要綱、pp. 785-790.

<sup>11</sup> 特に、統一思想に表現されているが、三大主体のリーダーは、必ず神の愛を実践する神の代身者である。

<sup>12</sup> その例として、謙讓 (humility)、真実 (authenticity)、召命 (voice) などがある。

<sup>13</sup> 自分が従うリーダーが、自分が尊敬できるほどのリーダーではないと、ほとんどのメンバーは強弁する。従って、現実社会で尊敬できるリーダーは非常にごく少数に過ぎない。

<sup>14</sup>

次元で象徴的によく要約した表現である。

第四に、儒教で言う君師父一体が三大主体性と最も近い概念だと思う。儒教の君師父一体は君子のリーダーシップと言える。違いといえば、儒教では、神や良心を言及しない点であり、統一思想では指導者の根源を神だと明確に言及しており、また、そのリーダーシップの発露は神の愛を実践するという点で、より具体化されているという点だ。尊敬の根源はどこから来るのか？尊敬を受けた指導者の品性はどこから来るのか。この質問に統一思想は、神という目に見えない存在を仮定し、その存在がまさに利他心の根源であると仮定することで、論理的に解決している。この点は、首領シップと差別化されている部分である。金日成主体思想で、金日成首領は人民と社会の要求によって、どこかで登場した人物だが、その首領の品性の根源は言及されていない。

第五に、三大主体リーダーシップの概念を研究することで、宗教理念を基礎としたリーダーシップに対する関心と理論化が触発される可能性がある。その理由は、次の章で詳しく説明する。

第六に、リーダーがメンバーを教育できなければならず、父母にならなければならず、主人としての責任を果たさなければならないという3つの要件 (requirement) は、現代のリーダーシップ教育 (leadership development; LD) における新たな里程標となるだろう。リーダーシップ教育モデルは多く開発されているが、用語が乱立して混乱しており、似たような概念が重複しており、理論的には停滞している。三大主体のリーダーシップが提案する3つの領域は、このような混乱したモデルの区画を作る (clustering) のに、非常に有用であるものと思われる。

#### 4. 首領シップと三大主体のリーダーシップの比較

リーダーシップ研究の一般的な研究領域的区分であるリーダーシップ特性 (leadership trait) は、リーダーシップ行動 (leadership behavior)、リーダーシップ状況 (leadership contingency) という3つの枠組みを活用して、首領と三大主体の人性、関係行動、課業行動、状況に分かれて分析する。

まず、リーダーの人性の面から見ると、首領シップは完全無欠性、三大主体のリーダーシップは師匠を強調する。首領は一言で表現すると、完璧なリーダーである。首領は完璧さによって人民大衆の尊敬を受けて追従 (follow) の根拠となる。首領は人民大衆が備えていないいくつかの点での優位性が存在するため、人民大衆は選択の余地がないことになる。金日成首領がパルチザン活動をしながら、何百回戦って何百回勝利したために、誰も彼の勝利を疑うことができないのと同じだ。量的に表現すると100%である。しかし、この完全無欠性の源は明かにされておらず、完全無欠性の論理的限界についての十分な根拠を提示できずにいるという欠点がある。これに対し、三大主体は師匠だ。師匠は弟子を教えることで弟子たちの尊敬を受けて追従の根拠を獲得する。まるで先生の日、弟子たちが先生に花をつけてあげるように、その恩恵を根幹として指導することができる理由が蓄積されるのと同じである。師匠が弟子たちに教えることで指導者の権威を獲得するということは、説得力がある。近代的組織で一般的にリーダーはメンバーより優れているが、メンバーを成長させることで尊敬を受ける。メンバーの成長をおろそかにしたままリーダーだけの権威を振りかざすリーダーは権限を持続させるのが難しいというのが一般的見解である。そのため、金日成主体思想はまるで小説天路歷程<sup>15</sup>で描写されているように、首領と人民大衆との乖離をどのように克服するかという課題を持っている。首領の近くに行きたいが、行けば行くほど遠くなる首領と人民大衆との乖離をどのように克服するかという問題が残されている。

第二に、リーダーの関係行動の側面から見ると、首領シップは父の行動、そして三大主体のリーダーシップは、父母の行動を強調する。父が家族の代表として権威を持っている一方、

---

<sup>15</sup> 天路歷程、The Pilgrim's Progress

三大主体は父母としての権威を強調する。現代社会で男女平等は不可抗力的なアジェンダとして受け入れられているが、三大主体のほうがより男女平等的かつ均衡的 (balanced) と見るしかない。最近のリーダーシップ理論は、母性 (maternity) の役割に多くの関心を持っており、最も大衆的に人気のあるリーダーシップモデルといえる感性リーダーシップ (emotional leadership) の構成要素を見ると、女性的な特性が多く反映されていることを知ることができる。女性的リーダーシップは、組織社会でますます重要性が認められている。実際に多くの組織、国、企業などで女性リーダーたちの割合が高まっている。このような傾向を見てみると、北朝鮮の父首領は時代に後れた概念である。むしろ男性のみを強調することによって発生する副作用を組織のメンバーがそっくりそのまま社会的コストとして受け入れるしかないと判断される。一方、三大主体は父母としてのリーダーシップを強調することで、理論的バランスを維持している。父母は子供のために犠牲になる存在である。組織のメンバーに父母として尊敬を受け取るには、リーダーがメンバーのために多くの犠牲と奉仕を施さなければならない。従って、急変する現代の組織社会で、父母という用語でメンバーに尊敬と追従を獲得するのは現実的に容易ではない。いまだ父母型リーダーシップは、現実社会で到達し難しい高レベルのリーダーシップ行動を強調するとみることができる。

第三に、リーダーの課業行動面で見ると、首領シップは革命性、三大主体リーダーシップは、主人意識を強調する。首領は革命を実行する共同体のリーダーとして共同体への責任を持つ。ところが弁証法的革命のためには闘争が避けられず、この共同体は、闘争する共同体である。三大主体は主人として共同体に対して愛の心を通じた管理責任を負う。公的基準で対象を管理し、責任を負う人が統一思想で表現する“真の主人”である。首領と三大主体の両者は、同じように共同体を主管 (own) する人であるが、その方法的特性において非常に異なる特徴を描写している。首領は闘争を通して主管するリーダーであり、三大主体は愛を通して主管するリーダーを語っている。首領は闘争を通じて、既成社会を転覆させるべき重大な任務を持つ共同体のリーダーであるため、極端な行動をするリーダーをいう。これに反して三大主体の真の主人は、お互いに調和して生きる恒久的平和世界を追求しており、リーダーとして愛の発露によって共同体を管理することで、共同体の持続的成長に責任を持つリーダーとして描写されている。

第四に、首領が持つ闘争性と革命性、三大主体が持つ利他心と平和愛好性を考慮すると、首領は社会的不満と非効率によって社会的臨界点が極に達した状況において適切なリーダーシップと見ることができ、三大主体は、メンバーが平和的かつ漸進的發展を求めている状況で適切なリーダーシップと見ることができる。

## 5. 結論

リーダーシップの視点で、金日成主体思想と統一思想に関する議論は、いまだ学者たちの注目を受けられずにいる。そのため、この分野に関する学術的ニーズは非常に魅力的だといえることができる。本研究は、リーダーシップの観点から、金日成主体思想の首領論と統一思想の三大主体思想をroughlyに比較分析することで、その後の研究のための基盤を磨くところに目的があった。首領シップと三大主体のリーダーシップはリーダーシップ研究に大きな話題になる潜在性があり、さまざまなリーダーシップ研究がもっているジレンマの方向を提示することができる新しい概念を持っていることを確認できた。この二つの哲学が持つ学術的価値をリーダーシップという形而下学的次元で確認してみる機会になったところに、本研究の価値を見いださなければならないと思う。

本研究を通して、暫定的に次の結論を提示したい。

首領論や三大主体思想は、リーダーシップ研究で注目すべき新たなリーダーシップモデルになる可能性が十分にあると思う。また、研究の方法論において、それぞれ独立して研究するより比較研究を通して行うほうが望ましいと思う。なぜなら、金日成主体思想と統一思想は哲学的にかなり似ているものの、同時に差別化された論理構造を持っているからである。これにより、今後のリーダーシップ理論が目指すべき人文学的に豊かな理解と学際的に広い理

解に到達することになると思う。

一方、本研究の限界は、次のとおりである。

まず、北朝鮮社会と北朝鮮の文献へのアクセスが限定的であるため、二次資料を多く参考にした。二次資料を活用した分析に対する誤謬の可能性が潜在している。第二に、リーダーシップの観点を中心に金日成主体思想や統一思想の哲学的議論をより広範囲に探索できなかった。おそらく、本研究者がまだ確認できていない多くの学者たちの見解が欠落しているだろうと判断される。第三に、首領や三大主体の事例となりうる実際のリーダーの事例を時間的制約のために十分に提示できなかった。

## 参考文献

- ギョングュサン “北朝鮮主体思想の儒教的性格究明” 韓国教員大学教育大学院. 修士論文. 2008年.
- ゴウンジュン “金日成主体思想の文献的批判” 延世大行政大学院. 修士論文. 2002.
- 金ドングン “主体思想の正当化根拠としての社会政治的生命体論” 『大韓政治学会報』 14 (2)、2006.
- 金ビョンロ “北朝鮮社会の宗教性：主体思想とキリスト教の宗教様式比較”. ソウル：統一研究院. 2000年.
- 金シンソク “北朝鮮の主体思想と首領制の形成過程に関する研究” 慶熙大行政大学院. 修士論文. 1998年.
- 朴ジョンワン外 “北朝鮮の政治社会化と首領観に対する認識変化の研究：1990年代経済危機の前後、北朝鮮離脱青少年の認識変化を中心に”、“政治情報研究”、12 (1)、2009.
- 申ドンフン “北朝鮮指導者金日成と金正日の政治的リーダーシップ研究” 高麗大学大学院. 修士論文. 2011.
- 李キョンシク “北朝鮮の首領制に関する研究” 釜山大大学院. 修士論文. 1999年.
- 李ビョンス “過渡期北朝鮮哲学に現れた変化と理論的特徴”、『統一文学論叢』. Vol. 50、2010.
- イム・ハンピル “主体思想の‘人間問題’に関する研究” 慶南大北朝鮮大学院. 修士論文. 2005年.
- ジョン・ジョン “主体思想のキリスト教的特性に関する研究” 建国行政大学院. 修士論文. 2010年.
- ジョ・ヨンシク “主体思想の首領論に対する批判” 円光大学教育大学院. 修士論文. 2001年.
- 統一思想研究院. “統一思想要綱”. ソウル：成和出版社. 2001年.
- Kellerman, Barbara. *Bad Leadership*. Boston, MA : Harvard Business School Press. 2004年.
- Kellerman, Barbara. ed. *Leadership : Multidisciplinary Perspectives*. New Jersey : Prentice-Hall. 1984年.